

---

# 屈折ラバーズ

日向 凧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

屈折ラバーズ

### 【Nコード】

N2822I

### 【作者名】

日向 凧

### 【あらすじ】

偏った価値観を持つ若者達が送る準恋愛ストーリー。

登場人物 袴田駿【はかまだしゅん】バスケット部。一応主人公。美少女大好き 早瀬結羽【はやせゆう】陸上部。黒髪美人。お金大好き 吉野莓【よしのいちご】陸上部。駿の幼なじみ。甘いもの大好き。 大槻隼人【おおつきはやと】帰宅部。駿の良き相談役。二次元大好き

「ねえ、駿ちゃん。やっぱ止めた方がいいんじゃない？」

「ばあか。止める理由なんてねえよ。」

朝の星座占いも今日は1位だった。迷う事はない。

「確かに早瀬さんはカワイイと思うよ、女の私から見ても。けど普通まともに話した事もない子に告る!？」

「吉野はわかってねえな。カワイければ全てよし!!入学式の時人目見て俺はこの子と学園生活をエンジョイするって決めたんだ。」

「あつそ。もうお好きにやって下さいな。ほら、あれ早瀬さんじゃないの?」

「あの黒髪美少女は間違いない!明日には二人でラブラブ登校するところを見せつけてやるから楽しみにしとけよ。」

「はいはい。どうなっても知らないから...。」

「早瀬さん。」

校門から出てきた彼女に後ろから声をかける。近づいて見る彼女は遠くで見るより10倍カワイく見えた。

「あ、袴田君。どうしたの?」

「前置き無しで本題に...。一目見た時から惚れました。俺と付き合ってください。」

「気持ちはずれしいけど、ごめんなさい。」

躊躇と呼べる間もないくらい、ほぼ即答ではつきりとフラれた。

「ほとんど話した事もないしいきなりだから困ると思うんだけど...この気持ちはマジだから!!絶対後悔させないし幸せにするから!」

「幸せに...する?」

「うん!俺と付き合ってよかったって思えるようにする!約束する!」

「ねえ、袴田君の家ってお金持ち？」

予想していた返事とは違ったが、俺は真面目に答えてみた。

「まあ普通の家庭かな。オヤジはサラリーマンで中流階級ってやつ。」

「

「そう。」

「あの、それでやつぱり付き合うのは無理かな？さっき言ったみたいに俺、早瀬を絶対幸せに……」

「中流風情が偉そうなこと言ってるんちゃうぞ……」

「へ??？」

「何が幸せにしたるやねん。そんな簡単<sup>♪</sup>に言うな!!じゃああんたはウチがあれ欲しいこれ欲しいとお願<sup>い</sup>したら何でも買<sup>っ</sup>てくれるん!?!無理やる?お金がなかったら幸せなんかなられへんのやボケ!!!!!!」

「早……瀬……さん?……ですよね。」

間<sup>ま</sup>が空<sup>く</sup>くこと数秒。俺の体内時計では長針が一周するくらいの長い長い数秒後

「きゃっ!あの、私たら、その……と、とにかくごめんなさい。」

言い切ると同時に走り出した彼女の後ろ姿は、一瞬のうちに点となつてそして消えていった。

俺はしばらくの間校門を背に立ち尽くすことしかできなかった。

「関西弁恐えよ……。」

半泣きの俺は坂の向こうに沈む夕日に誓<sup>ちか</sup>つ。もう恋なんてしない……。



## EP2-1 (駿と隼人)

昨日はほとんど寝ていない。フラれたショックよりも彼女：早瀬結羽のイメージとのギャップがあまりにも衝撃的過ぎて眠れなかった。(学校行きたくねえな。会うの気まずいし。)

寝不足でくらくらする脳内でそんなことを考えながらも、制服に着替えている自分がおかしい。

(俺ってばやつぱ真面目人間だわ。)

ホームルームが始まる前の教室。いつもと変わらない光景がそこには展開されていた。

「よお。元気ねーじゃん。何かあったか？」

「見りゃわかんذار。落ち込んでんだよ。」

「やつぱフラれたか。そんなに気にすんなよ。どうせダメ元だったんだしさ。」

「まあ、当たってはいるけど…もうちょっと慰めとかあってもいいんじゃないの？」

こいつ、大槻隼人おおつきはやととは少し話したときから意気投合しクラスで1番の友人だ。

昨日の告白も事前に相談した仲だった。

「ま、早瀬って学年でもトップ5に入るって噂だし駿じゃ無理無理。入学してからもう5人くらいからコクられたって話もあるし。俺は興味ないけど。」

「フラれただけが原因じゃねえよ。」

「??？」

「関西弁…怖い…」

「はあ？」

「俺は早瀬に関西弁で陵辱されたんだよ!!おれにとって天使みた

いな子だったのに実は悪魔だったんだよ！」

「おいおい、落ち着け。積もる話は放課後駅前のファミレスでおもしろ…じゃなくて辛い話は親友の俺が聞いてやるからさ。」

今日はとても部活に行く気分でもなかったし、こいつと無駄な時間を過ごす放課後も悪くない。

それに、内に溜まった感情を吐き出さないと1週間は不眠症になってしまいそうだ。

チャイムが鳴り授業が始まる。授業の内容はサッパリ頭に入っていない。

頭に響くのは教師の声でなく、早瀬の罵りの言葉だけだった。

## EP2・2（結羽と尊）

なんか教室の空気が淀んでるなあ。原因はあの二人から湧き出る負のオーラね、きっと。

駿ちゃんはどうせフラれたショックとかでしょうけどなんで早瀬さんまで??

クラスメイトとして、同じ陸上部員としてほっとけないわ!!

「早瀬さん。おっはよー!」

「あ。おはよう、吉野さん。」

「私の事は尊でいいって。前にも言ったじゃん。」

「うん、そうだったね。ごめん。」

「謝らなくてもいいって。それよりなんか今日元気くない?」

「え!?そんな風に見える?」

「見えるってか感じる。もしかして昨日あのバカになんかされた?」

クラスでもう一人のマイナスオーラ全開野郎を指さすと、彼女は顔を覆って机に伏せてしまった。

「やっぱり駿ちゃんになんかされたのね!?私が話しつけてきてあげる!」

「待つて!違うの…。もしかして昨日の放課後、私達のこと…見た?」

「見てはないよ。ただあのバカが早瀬さんにコクるんだって盛り上がったから。それでなんか関係あるのかなあって思ってた。」

「じゃあ、何があったか見てはないんだよね?」

「覗き見するような趣味はないってば。それに結果わかってるのに見てもつままないし。」

「え?」



「早瀬さんみたいなお美人と駿ちゃんじゃ釣り合わないもん。あいつも落ち込んでるみたいだけど別に早瀬さんが気にすることないない。」

「…うん。」

「またそんな顔して！そうだ！放課後一緒に駅前のファミレスに行かない？期間限定でスイーツ食べ放題のメニューがあるんだあ。」

甘いモノ食べてたら嫌なこと忘れるよ」

「けど…」

「部活も今日はミーティングだけだし。もちろん私の奢りだから！ね？」

「じゃあお言葉に甘えて…（ほんまはあんまり気分じゃないけど。奢りてことはつまりタダ！！関西人はタダには弱いんやあ）」

「決まり！！あっ、そろそろ授業始まるね。今から放課後が楽しみだ」

### EP3 - 1 (着火)

何なんだ、この状況は。

1つのテーブルを囲む高校生4人組は、周りから放課後を楽しむ若者として見られているんだろうか？

もしそんな視線を感じたとしても受け付けるもんか！そもそも隼人と2人のはずがどうしてこんな事に…  
事の発端は1時間前に遡る。

「けど、男2人でファミレスってのもなあ…。完全に浮いてるよな、俺達。」

「そう言うなよ。悩みを吐き出したらちよつとは楽になっただろ？男同士でしか共感できない話ってのはあるもんだぜ。それに…」

「それに、何だよ？」

「あつ！時間ピッタリ。吉野さん達、こっちこっち！」

「何で吉野が！？あと”達”って…」

「昼休み偶然吉野さん達が放課後ここに来るって話聞いてちゃって。駿はどうせ男2人じゃ楽しくないとか言い出しそうだから一緒にどう？って誘つといた。」

それから1時間。

もちろん楽しいはずはなかった。隼人はニヤニヤしてるけど…これは他人の修羅場を見物する卑しい類の笑みだ。完全にハメられた。向かいに座っている早瀬も俺と同じ様に俯きっぱなしで、吉野はひたすら食べ放題とかいうスイーツフルコースを口に放り込んで満面の笑みを浮かべた。

「この味、このボリュームで1200円で食べ放題だよ ああ、明日死んでもいいくらい幸せだ。早瀬さん全然食べてないじゃん！奢りなんだから食べなきゃ損だぞ。」

「あ、うん…」

早瀬も俺がいる事なんて想像もしていなかったようだ。俺と同じ反応なのはその証拠で、たまに目が合っではお互いすぐに下を向いてしまう。

「（おい、駿。せっかく仲直りするチャンスなんだから何か話せて！）」

「（仲直りって…。別に喧嘩したわけじゃねえし。）」

「（けど、このままでいいのか？1回フラれたくらいで諦めんのかよ。）」

「（それは…）」

バンツツツ！！！！！！！！

突如ファミレス中に響いた物音。客の視線は音を発した一点に集中する。

そこにはテーブルを叩いて勢いよく立ち上がった吉野がいた。

「あんたらち…ヒック…さっきからつまんにゃいによよ…ヒッ…」

（ヤバイ！久しぶりのあれなのか、吉野）

EP3・2(炎上)

「あの…吉野？」

「にやによ…私はね、いい？ちゅまんにやいって言うてんの！…ヒッ…。」

「まあ落ち着けよ。ほら、水でも飲んで。」

「話そらしゅんじゃにやい！！せっかく放課後こうしてあちゅまっ  
てんのにさ…ヒクッ…駿ちゃん黙ってばっかだししらせちゃうのら  
よ…。」

「(お前は食つてばっかだったじゃねえか！)」

「高校生が、しかもらよ…男女2人ずついてさっ…こんなしらせて  
ちやダメじゃん！…うん、きつとダメダメらよ。ヒッ…ねえ、みん  
なで楽しいコトしよお」

「(おい、駿！なんか吉野さんの様子がおかしいけど、まさか…)」

「(ああ。見ての通りありや酔ってるな。)」

「(けどずっと甘いもの食ってただけに見えたけど。)」

「(だからそれでだよ。こいつは甘いもので胃袋が満たされた時酔  
うらしい。今回が初めてじゃないんだ。)」

「(そんなの聞いた事ねえよ！)」

「(俺も信じられんが…隼人よ、現実から目を逸らすな！あれがま  
ともな人間か？)」

「こらあ！！そこによ男子2人！！にやによコソコソ…ヒク…そ、  
そんなに私の話つまんにやいの？」

「いや、そんなことは…」

「ふん、どうせ私にやんて…ちゅまんにやい女よ…う、ううう…」

「(駿。説教だけじゃなく泣きも入るのか？たちの悪い酔い方だな。

」

「（冷静に分析してる場合かよ！！他の客も店員もみんなこっち見てんじゃねえか！！）」

「（仕方ねえな。ここは俺が助けてやるから話合わせろよ。）」

「吉野さん、実は俺もこんなつまらない高校生活じゃダメだと思っ  
んだ。そこで提案なんだけど来週の週末にこの4人でどっか遊びに  
行かない？もちろん駿は賛成だよな？」

「あ、ああそうだな。よかったな吉野。これで高校生活の楽しい思  
い出が作れるぞ。」

「ううう…ホントに？早瀬しゃんも来てくれりゅ？？」

「そおだね。せっかくのお誘いだし私も行くこう…かな。」

「やったあ！！みんな絶対約束らからね…」

そう言って吉野はふにやふにやとテーブルに崩れ落ちた。どうやら  
一瞬で眠りに落ちたらしい。

残された俺達3人は周囲の痛すぎる視線に耐えることができず、吉  
野を引きずるようにして店を出た。

おまけEP（それぞれの午前0時）

それにしても、吉野のやつ…あんだけ暴走しといてちゃんと記憶がある…るのが恐えよな…。

て、それよりも早瀬だ早瀬。なんか気まずい雰囲気でもしやべれなかったけどやっぱカワイイよ！！

この前はイメージとのギャップでちよつと戸惑ったけど性格とか関係ねえよ！！しかも、だ。吉野の暴走のおかげでお出かけも決まったしこれはチャンスなんじゃないのか！？おまけ2人が余計だが…今度こそ親しくなってお金じゃない俺の魅了を分からせてやるぜ！！

はあ、眠い。ん？もう12時かあ。そろそろ布団に入る。

「今度皆で遊びに行こう！」っていう楽しい話だったのに、なんか帰り道はみんなよそよそしかったというか…。早瀬さんと駿ちゃんも朝からずっとテンション低いまんまだったし。けどここで引いたら負けよ、苺！自分から関わった事だしあの2人の面倒は私が見るわ！勝負は来週末よ！

面白い展開を期待してあの2人を誘ってみたのは正解だったなあ。予想以上に、というか予想なんて枠からはみ出して遥かに面白そうな展開に。これは来週末も期待できそうだ。

それにしても吉野さんのあれは…ってずっと気にしてちゃダメだな。まさかそんなはずは…リアルな恋なんて俺の性に合わない、ってか恋でも何でもねえよ、きつと。

なんかめっちゃくちゃ疲れる1日やったなあ。それにしても吉野さん

のあれは何や！？関西人やから何でもつつこめると思ったら大間  
違いやで！せつかく奢りやったスイーツもほとんど食べられへんか  
つたし、行きたくもないのに一緒に遊びにいくはめになるし…ほん  
ま、うちはない子やわ。

高校こそは楽しもうと思ってたのにな…。先行きも真っ暗闇や。

EP4-1(はあ。)

約束の週末、俺達4人は電車で片道50分と決して近くはない郊外のショッピングモールへと辿り着いた。映画館やちよつとしたアミューズメントパークも隣接していて、注目の遊び場として情報誌にもよく取り上げられている所だ。

「ごはんも食べたことだし、次はショッピングよ えーと、まずは東館の…」

ひとり張り切る吉野に俺達、特に早瀬は磁石で引つ張られるように自分の意思とは無関係にぞろぞろと後に続いた。

「(ちよつと駿ちゃん！全然楽しそうじゃないじゃん！せつかく早瀬さんもいるのにもつと楽しそうにできないわけ！？)」

「(できるかよ！！早瀬を見る。早くも帰りたいオーラが始めてんじゃねーかよ！まあ、仲良くなればいいとは思ってたけどだいたいここに来ることになったのはお前が暴走して無理やり…)」

「(結局気合いが足りないだけ。そんな駿ちゃんに私からチャンスをあげちゃおう)」

「(チャンス?)」

「(大槻君、準備はいいわね?)」

「(いつでも発動準備OKであります!!)」

「(ウルトララブラブ作戦 発動!!)」

「あっ！！やっぱ西館のショップも捨てがたいなあ…ねえ、どっちの方がいいと思う？大槻君？」

「迷ったんなら二手に分かれてお互い情報を交換すれば？いい店が見つかったらケータイで連絡してそこに集合ってことで」

「ナイス、ナイスアイデアよ！でことで、私は大槻君と西館に行ってくるから駿ちゃんと早瀬さんはこのまま東館の方よろしく。」



「おい、ちょっとお前ら…」

わざとらしいにも程がある寸劇を見せ付けられた俺は、ただ呆然と2人の後姿を見送ることしかできなかった。どうやら俺と早瀬を2人きりにしていい雰囲気を持っていくというのが「ウルトララブラブ作戦」の全貌らしい。

「えっと、どうしよつか？」

「行って見ようよ、東館。」

「そうだな。」

告白の日の気まずい空気はあいかわらず俺と早瀬を包んだままだった。普通の会話（ほとんど吉野を介しての）は教室で交わすような関係だけとお互い表面上の付き合いで、会話というより社交辞令のような上辺だけの言葉のやりとりが続いていた。

（はあ。やっぱり断つとくんやった。うちは人が良過ぎる…約束したてゆっても酔ってた？吉野さんとの口約束やし適当に理由つけてキャンセルすればよかったんや！！高い電車賃払って着てみたら知らん間に2人きりなってるし…はあ。アカン、ため息しか出えへん。）

早瀬がそんな事を考えているとはもちろん知らない俺は、東館へ向かう彼女の後を少し後ろから付いて行く。

EP4-2(はーあ。)

黙々と東館へと向かう早瀬に、俺はただ一定の距離をあけて着いて行くことしかできなかった。

2人きりになってから事務的な会話以外言葉を交わすことはしていない。というか彼女がそれをさせなかった。正確には「話しかけないで!!」という無言のオーラを背後に放つ彼女に話しかける勇気がおれにはなかったのだった。

(このままじゃまずいよな、さすがに。せつかくあいつらがくれたチャンスが無駄にするのもあれだしダメ元で…)

「えっと、あのさ早瀬…」

「よお、もしかして早瀬か？」

俺の声に被さってもう一つ彼女を呼び止める声。これまでペースを崩さずに歩いてきた彼女が慌てた様子でこちらを振り返る。明らかに反応したのは俺ではないもう一人の声だった。

「やっぱりそうかよ。お前こんなとこで何してんの？」

「石川君…。別に関係ないでしょ!?!じゃあね。」

「久しぶりに会ったのに冷てえな、おい。ちよっと向こうで話してもしてこうぜ。」

「話すことなんてないから。私急いでるの。」

「嘘つくなよ。いいから来いって。」

彼女の肩に伸びた男の右手がそこに触れる前に、俺が男の右手をつかんでいた。バスケ部で鍛えた瞬発力がたまには役に立つもんだ。

「なんだよ、お前。早瀬の男か？」

「そうだけど。」

「ちょっと、何勝手に…」

早瀬が俺との関係を否定する間も与えず、男はおれの手を振り払って続けた。

「なんだ男いんのかよ。この彼氏さんはお前のこと全部知ってて付き合ってるのか？どうせ秘密にしてんだろ？」

「だから、彼氏とかじゃなくて…」

「まあ、どっちでもいいけど。そのおんた、この女とおんま関わらない方がいいぜ。だってこいつ、犯罪者の娘だからさ。」

「…」

早瀬は何も言わずに必死で何かをこらえているように男の方を見つめていた。男は続ける。

「こいつの親父が中学ん時警察に捕まったんだよ。新聞にも載るよ。うなでかい事件だったからあんたも知ってるかもな。そうだよな、早瀬？」

「…」

「無視してんじゃねえよ。まあ、マジな話だから反論できねえだけか。そういう事だからこいつと関わるとあんたも変な事件に巻き込まれるぜ。」

「話はそれだけ？はーあ。せつかくのデートなんだから邪魔すんなよ。行こうぜ結羽。」

B級映画の台詞にも採用されないような捨て台詞を吐いた俺は、早瀬の手を引いて目的の東館の方へ進んだ。男は追ってくることもなく俺たちの後姿をにやにやとした目つきで見送っていた。



EP4-3 (はぁ!?)

逃げるように場を抜けてきた俺たちだけど…これまで以上に気まずい。

俺と早瀬の間にはケンカをしたカップルのような、周りから見てもわかるようなピリピリした空気が漂っていた。

「私。もう帰るね。みんなには気分悪くなったからって言うておいで。」

「おい！ちょっと…もしかしてさっき“彼女”って言った事怒ってる？それとも呼び捨てにした事？」

「そんなんじゃない。」

「じゃあなんで？」

「さっきの話ホントだよ。私のお父さん悪いことして捕まっちゃって。それで中学の時いじめられてたんだ、私。軽蔑するでしょ！？犯罪者の娘なんかと絡みたい人なんていないもん。こんな事お願いできる立場じゃないけど今日の事は誰にも言わないでくれるとうれしいな。」

「はぁ！？何それ？すげー勘違い。」

「え…？」

「中学ん時どおだったかわかんねえけど、軽蔑とか全然思わねえよ。」

「けど、だって…」

「ははっ。何か早瀬らしくないな。」

「うう…」

「あれ、もしかして…泣いてる？」

「泣いてへんわ！！アホ、こっち見んなー！！」

「(たまに早瀬って関西弁になるよなあ。こっちが素なのかな?)」

「あれ、駿ちゃん！？東館行ったんじゃないの??」

すぐ後ろに吉野がいたことに必要以上に動揺する俺。今の早瀬は誰にも見せてはいけない。理由はないけど早瀬を裏切ってしまう、そんな気がしたから…。

「なんか道に迷っちゃって。気がいたら元の場所に戻って来ちゃった。」

俺の背中の方からいつもの声のトーンで早瀬の言葉が飛んで来る。

(立ち直んの早ツ!!さっきまで泣いてたじゃんかよ…。)

「そうなんだ。もう！駿ちゃんがすっかりしないから!!私と大槻君で良さげな店見つけたからみんな で向こう行ってみよっか」

「なんで俺のせいなんだよ。ま、とにかくおまえ達の見つけたところ行ってみよっか。」

同意を求めるつもりで後ろの早瀬にちらつと目を向けると、照れ笑いの様な少しはにかんだ表情を見せる彼女がそこにはいた。

(ちょっと早瀬に近づけたのかな。)

そんなことを考えて一人浮かれる俺は…

取り残されていた。

「ちょっと、お前ら勝手に先行くなって!!」

EP5 - 1 (結羽、中1、春)

まだ私が大阪にいた頃。

両親と私の3人は公営団地の一室で平和な毎日を送っていた。お父さんは毎日夜遅くまで働き詰めで、私が布団に入る頃に帰ってくるような生活。お母さんは病気がちで働きに出ることはなく、朝から寝込んでいることもしばしばだった。

決して裕福ではなかったけれど、両親は私が求めた物は全て与えてくれていた…と今振り返れば思う。

そんな何気ない幸せな日常が崩れ始めたのは中学校の入学式の、そう、あの日から。

「ただいまあ。」

「結羽！！今から病院に行くから準備しなさい。」

「なんでお父さんが家におるん？この時間はいつも仕事じゃあ…それに病院て??？」

「母さんが倒れて病院に運ばれたんや。職場に電話があつてな。かなり…危ない状態らしい。」

危ない状態？突然の事態に状況が飲み込めない私も、父の表情から事の重大さを感じずにはいらなかった。結局その時感じた嫌な予感的中することになる。新品の制服に浮かれながら玄関を飛び出した私の背中に飛んだ「いつてらっしやい」のか細い声。それが私の聞いたお母さんの最後の声…。

「なあ、お医者さんは何て？」

「何とか一命は取り留めたそうや。けどな…意識が戻るかはわから

んらしい。」

「わかってそんな!!」

「この病院やったら治療にも限界があるみたいでな…東京の大病院に行ったらお母さんの症状に詳しい先生がおるそつや。」

「それやったらすぐに東京行こ!」

「結羽はそれでもええんか?小学校からの友達とも離れ離れになるぞ?」

「それは…寂しいけど…私のお母さんは1人だけやもん。お母さんが元気になったらまたこつちに戻つて来たらいいやんか。だから…。」

その夜は一生分の涙を流した気がする。中学生になったばかりの小娘が一生の長さなんて分かるはずなのに、もうこれ以上涙はでないと思つた。



EP5・2（結羽、中2、春）

東京に来てからは一日一日が一瞬で過ぎていった。平日はお母さんの代わりに家事に追われ、週末は朝から面会時間ぎりぎりまで病室に籠っていた。体調が優れない日は殆んど寝たきりだったお母さん…。

それでも、何も話ができなくても同じ空間にいられるだけでその時は幸せだった。

「早く退院して一緒に大阪に帰ろう。」

眠っているお母さんの耳元にそうやって何度も話し掛けた。

そうして日々は過ぎ、季節は巡って東京で過ごす2度目の春。いつもの毎日。

その日も私は夕食の支度を終えてお父さんの帰りを待っていた。だけど…

「もしもし、結羽ちゃんか？」

「柏のおじさん？」

千葉に住んでいるおじさんはお父さんの兄にあたる人で、私たちが引越して来る時にはいろいろ面倒を見てもらった。

「お父さんに何か話？今日はまだ帰ってなくて。」

「そのお父さんの事なんだけどな…」

「??？」

「さつき警察から電話があって弟が逮捕されたらしい。もちろん、何かの間違いに決まってる！だから結羽ちゃんも慌てる事はないから。」

「え…お父さんが…何で？」

「とにかく詳しい事が分かっただけです。また連絡するから、今は落ち

着いて家でじっとしているんだよ。いいね？」

その後、結局電話が鳴ることもお父さんが帰って来ることも無かった。

無力な私は、ただ部屋の隅っこでじっと固まっているしかなかった。電池が切れたロボットのようになり、思考停止状態でひっそりと。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2822i/>

---

屈折ラバーズ

2010年10月9日06時49分発行